温故新集

書札 上



此武家名目 温故新案 十巻ハ 何某ノ
著作 現今學校中人猶ノ 曽經ヒ 無之
而ヲ今般 余ヘ 寄贈ノ 爲メ 之ヲ 贈ル
明治八年十月六日 東京 来 東京 書
屋三丁 二番地住
蜷川式胤





夫書記ハ古今共法有りて上下礼儀を定むと
いへども建武年中等持院贈左大臣公一天草
創乃比より武家の權威追繼て權驕を立ル族
不論嫡庶混乱として世に至り放
さも法を記し置る寳篋院殿早世にましまし
鹿苑院殿にいたりて征夷将軍に備り給ふ付
細川武蔵守頼之朝臣被奉父以来度勧解由小路



義将畠山右馬佐基国之官領并補任して天下の
三職といふ事を始給ひ此比上古の風流好事多
故に雖有故実其品頗変して詞艶に美成
風なり然に今川氏頼小笠原長秀伊勢氏
満忠等に仰て礼楽射御の規式を紀し四年に
以て再三紀明せしめ此を前書と為して公卿
大夫の書礼と定給ひしより已来代々是に拠る

年々に廃して今当世に古法わつかに有故
天正年中小笠原長時切磋琢磨して書札の
法を改め家の秘とし以て世に当用せしめんと
すること十ヶ年にして其中にも雑用故いふんなれと
三代以後儀法奉元家に出て今猶名家
其称多かりし此殿様様の文字并謂礼しるす
一事不付古法故于世書札上中下の文字書年八

右者時貞慶其外家之秘事とかくいへり
ちかくハ菊亭右府公の書案或勅之為後士
録之窺知者之懐而以類式愚慮編小
冊世間謝後生有明眼人被改而此者也不遠
穴賢々々莫及外見

書札上

一 公方様江言上并御請文之事

一 大納言宰相江之事

一 僧家江書状之事

一 副札品々詞極之事

一 返書詞極之事

一 感状詞極并所領折紙詞極之事

一 與奪状之事

一 字出拾折紙附御字拝領其外請文之事

一 主人江官申上候之事

一 賣券状之事

一 代官補任附請文之事

公方様江言上并請文之事

謹而致言上何國城御番請取候所ニ出来仕候
大略近日可為首尾与存候所ニ何様昼夜無
油断候次第於御前可然様ニ預御披露候
恐々謹言

二月二日　　上野民部大輔
　　　　　　　　貞清判

縫下野守殿

凡世話也但民の時ハ直の披露状也

同披露状但先ハ宛状私披露状と云也

然者彼之儀彼郡出入之儀被 仰下之趣

畏承候早申付宜可令言上之旨可然

様可預御披露候恐惶謹言

上野民部左衛

二月五日　山名伯耆守殿　但右不

進上

披露状ハ都而其恐有之下申上て不叶

子細の時ニ如斯相調候　披露状也

あつて直ニ言上状ニ申なり私ニ云

宛所ハ進上を除て山名伯耆守様と

書ヲ殿と極メ書ハ一入致之

請文調様之事

謹而致言上候然ハ何々之儀如此御座候　御内書

奉致頂戴候當地御普請之儀各御沙汰被成候ハ

大略今月中相究可申候然者極メ可申上旨

て能極て預ケ被成候処忝存候

松田九満佐

貞信判

三月十二日

伊藤下野守殿

右迄の披露状と封紙の時ハ謹言上と認て

書置候謹而上書脇　此宛所

様とて其し武ニ此時ハ内封ニ不

私云当所ハ宛所極て書人ニ而中ニ下

大中納言宰相ニ已上事

尊書之趣遂拝見候訖御同前之趣ニ存候可得
其意候御不一跡略存候得共可然様可被仰達候

松田左衛門大夫　貞元判

二月二日

廣橋大納言殿
　尊報人々御中

右宛所ハ日付ヨリ一字上テ書之大納言ヨリハ人々

ヨリ猶ハ状も可然候間諸事ヨリ書札の時ニ
拝札とて一字の人数ニ当不申候こと
書調ヘし此方ヨリ諸事ヨリ如何可有
私云當時ハ宛所真ナル様ニ書之是ハ旧不知
諸事ヨリの趣之

尊書拝御小袖二御頂戴候段本望之至候何篇
今度之御礼ニ中文ニ候間可被申上候得共此

裕福律公

廣橋黄門様ゟ被

二月三日

松尾信濃守

長光判

又右衛門事も先達右衛門書付差上候之

宰相江も因幡守也又人ニ依り少々様之大納言殿江

大将江被仰候人ニ納様ニ大将ニ似候人ニ

大男内大臣江もみしらか

私云当時の大中納言ニ

公方様御公達御出被成候也故の御方

不残記ニ不参候之

世紀弁見長尾殿被参衣又康元御馬被

幸下以宮之次第合被召候之由記て中入以来御

御使者被頼候上御悦伊達公

松尾信濃守
長光判

三月五日

唐名出雲也　坐鋪

名家ならしくは仰申

於将侍従の出羽太守へも大に類語若

出羽の事付記模之但出と不羽人也

國掉祀小准事もなく又は信称人も之をし

四位以上也し其人小位し書状乃

諸相ら下さ申し候

伊家もし状之事

又不合殊上以此なきは来八日来掛以挽

こ也は可以後来て致極少は此旨て存可言候

恐惶敬白

三月六日　松尾信濃守　長光判

南禅寺　衆侍者御中

南禅寺ハ亀山法皇落飾後禅林寺殿ト号メ禅宗ヲ皈依シ給フ今之南禅寺ハ北院ノ旧皇居之

南禅寺ハ五山の上てこさる由私なとハ一服
嘗親の也之其外五山僧も大略同前也
其門弟のものとへ致白も謹んと
てみなしれ

京五山

霊亀山天龍寺　萬年山相國寺　東山建仁寺
慧日山東福寺　一万壽寺（旅烏丸重内無山号）　以上五山

鎌倉五山

巨福山建長寺　瑞鹿山（スイロク）圓覚寺　金宝山浄智寺
亀谷山壽福寺　稲荷山浄妙寺

此白共ハ系之甲冑御門就令拝見候ハ大慶不
斜候しは宜しき諸席下て申入候恐惶謹言

松尾信濃守

六月七日

等持院進達候ハ

右ハ西堂之の趣之ニ候得とも少々京ニ又右

得共右中ニて書之蔭涼院等持院

拝見之自化の西堂ニ候ハ貴飯御編之

之不能拝顔候諸等段御下可為仕ニ候旁路候

千萬被隠候段申上ニ候ニ而相納而候

て中律之条令省略候急御座候

松尾信濃守

三月七日　長光判

玉公首座禅師

蒲團下

凡此節也道号也さて後堂首座ニて道法の

事也道号とて中ハ前堂首座ニて書候へ

道号を書時ハ座元禅師と可書之一寺の

何様ニても寺号又ハ院号なとゝも

未一寺号申請候段白去前不承候

内ゝ今ニても東堂三職諸御法度之事遂目

不可背旨候此段及御家来衆へも申達候

御心得ハ其ゝ謹之し

三月五日

松尾信濃守

長光判

慈公雅言 玉床下

凡出家也とも寺号院号抔有ハとも

嘗て紹光家ニおゐてハ従先ニ雖有

高位の御身なりとも持者たりと云とも

其の両堂の如く紫衣ニ而書札相調候ハ

古今の例也

公方様御連枝抔も相成のまゝ其分得

蹴鞠右松軒拓(こきくしせうけん)へハ直札ハ無之右猶

奉頼り

喪(ケ)中御法度て省略致し也可然様候

以飛札て御聞申ね得御意候

松田右衛門佐

八月十一日 貞光判

三福寺

此間宿中文を認し候

浄土宗へハ此節之禅家の書翰と浄土宗の

書翰は少々御用也年始大山書翰系

状の時にも紙縁を以送り無之右贈翰

句論の事之

茶若(おうめい)(チヤノコナリ)風俗に識る祝儀之哉相成候右

中迷れ之て候之

松尾信濃守

八月廿三日

含光院

此間寂中ニ御座候処

含光院ト申ハ七条道場の院号之由承
院号ニ而も寺号ニ而も無之候大政所浄土
宗ハ甚以困窮之下上之事ハ何阿院
ニ御座候ハヽ尚又ハ来ル抔大悦之候

尚書謹而辞退仕候抑此出洛之次第候

拝香合一 割紅 盃一枚 瑞諦
今般又以御安慮
之而御悦存候将亦態々令啓上之由申入候
不語期後喜候

九条大夫
義貞判

三月九日

進上 一寮（リヤウ）

上書北国番（セン）之礼紙ニ而相認上人

綸旨北中丸附大内殿より返札之

制札調様之事

禁制　安国寺

一 甲乙人等乱入事

一 諸人押而居住事

一 伐採(キリトル)竹木事

右条々若有違犯(イハンノヤカラ)之族者、可処(ショ)厳(ケン)科(クワ)之旨

依　仰下知如件

天正八年十二月日

山城守源朝臣判

今按の制札ニハ名字実
名氏朝臣判形にてを
書出の人ハ名字を記し
候禁制と年号下ハ
同通とそこして不宜る之
候式ハ竪板ニ調と
いつとも当時之様板と用
尤書儀之作ニ候文く

禁制

一 軍勢甲乙人濫妨狼藉事
一 陣取附放火之事
一 相懸兵粮以下事
右条々堅令停止訖若有違犯輩者可被處厳科者也仍下知件
天正八年二月日
山城守（花押）

軍陣にてハ禁制札と云ものを
立る也是ハ其所の被官人ハ百性
小身なる者調へし大将方
数多ある時ハ其所の時に
当る軍勢と調る判
さるへし禁制軍陣之
外のことにかきりさる大名なる
歟又ハ領内にてハ奥の家
に倣るへし

きんせい　河市情

一 おしかひの事
一 さうろんの事
一 ふつゝにこてよくきやく
せひせんの事
一 かうきうらの事
一 よろつうりかひへきとかくし至る
たてゝ一事さうといふた
いたいのこともうらあらハくしく
せひきせいはいあるへきもの也
仍下知件
天正八年二月日　左衛門尉藤原判
摂津守源朝臣判

凡此類之額治ハ奥書也
年号ハ在年号之判形あるへし
但氏さも調へし日の下ハ大名
并老の役として右治第一にて
及之禁制の制札ハ
名字と官名氏を書
判形あるへし下ハかくて名氏
かなハ小て書第一の極定也

守護之制札

禁制　所名

一　盗賊狼藉事

一　放火人事

一　博奕事

右条々堅令停止以

者也仍如件

天正二年八月日　貞信判

下知如件とハ理運の文言也

其國の守護代奉行之所

可有之者ハ其外ハ仍如件

執達如件杯とて調之

私領并他人の掟なき

所ハ右之如く調ても

不苦者也得

定

一　盗賊人事

一　放火人事

一　喧嘩口論事

右条々於違犯者

可被加恩賞者也仍

如件

天正二年二月日

三郎

二郎

一郎

ケ様の時ハ様板条数

多くて調候之文躰

にも調へし

何々の事との乃字を

書へからす

作と云字を好しく書

假名しるし書

山中民部丞貞光
掟書　大江掃部助勝光　河内国
中村兵部丞勝信
澁川郡荒島庄事
當知行之地也　猥ニ
陣取之者有之者可
申付者也　仍掟書如件
天正八年五月日

凡此證也日付此下ニ
名字判形有之候
口傳

掟書
一　博奕一切令停止事
一　於家中悪心之輩不見
隠て申間事
一　有思遺子細之時不依仁
不肖中格分者可為
忠節事
右之條々相守此旨者也
仍掟書如件
天正九年八月日　御判

紙調之説ニ
押之也棄之口傳

右書謂様之事

賀州下向人六拾人〈為荷物之〉輿或丁馬十疋諸関

渡無其煩可有勤之者也可被仰下也仍

下知如件

天正八年五月十五日

江州

越州

前丹後守源頼信判

沙弥

行能判

右京兆被官々八幡宮江社参人百人〈為之〉輿

拾丁馬十疋関所上下無其煩可為勤之者也

被仰出也仍如件

康安二年八月二日

大和守判

丹後守判

播磨守殿中

右通ニ上書謂也又人小者役者抔中丸

首ニ甚附ハ各家ニ判形書出又ハなと
調事とれとし常ハ折紙の〆済なり
堅折紙の時ハ日付年号書て下ニ朝臣
書の事二行以上ハ源朝臣定家と
日付下ニ源定家朝臣と書之

感状調様之事

今度於相州通合戦 之時首数事并討捕 術別之段感悦候也 彌忠節無比類候 于子孫可申傳候 之謹言 永正二 九月日　貞勝判 東良孫九郎殿

今度於下総八幡 郷合戦之時首二討捕 手柄之段感悦候也 仍刀一腰国光遣候 可為戦功状如件 永正二 八月日　貞勝判 長濱縫殿資

大般若經之義ハ与力波若摩訶の梅般若より
總与力合なしくゆ菩薩あるへき事白道
太郎ホれの字を加へ次郎と書て被
与力籠ないに依りハ近日上意也これ感
ゝ書加へ候しむ及右附文云乃段ハ一筆
不可定何哉摂紙之身を文ハ杉原等ゝと
摂く其調也又云粉骨花類之忠節

妙令感悦之所可励忠節事肝要也摂ハ一派
子細ゝゝ太刀并鞍下の馬名函衣摂ゝ文
言不甚佛種ゝ五手入事也口傳
従前雖也河水渡例以馬末渡海渡渡之類
盡堤振舞希代稀事也
三月日　源頼朝御判
佐々木三郎殿

許須折紙調様之事

分国頭城郡之内
壱万石之事充行畢
全令領知可抽奉公
忠勤者也仍如件
天正八年
三月二日　長時判
名字殿

分国新河郡之内
中村郷千石之事
令扶助之訖可令
全知行状如件
正慶九年
二月二日　成政判
山田三左とのへ

信濃国小嶋村七百貫
目録之別紙在之右軍忠為
加増充行畢弥可抽忠節
可抽忠勤状如件
年号
月日御判
二階堂出雲守殿

二階堂出雲守殿

被成人に出すとのゝ上包之大方之
ならい

右ハ上包の御調也今時能紙也
紙折本ニ調候紙ニ書ク紙
半紙と申もの也と云之

與奪状之事

就当家與奪在国之
上者、文書帳章代
分国進之、宜如先例
可被申付候、於当家
繁栄候、弥可為
肝要者也、仍執達如件

天正八年
六月吉日　長勝判

松尾新十郎殿

松尾新十郎殿　長勝

大形ニ拵之、紙の時ハ上下より巻七
当紙包之折紙ニ調へし

一字出候之事

一字御免許候、
依之雖被申候、
所役御理之上者、任
先規代用来候長
之字進覧候、恐惶
謹言

天正丁巳年上村信濃守
五月日　長勝判

吉良孫四郎殿
人々御中

一字之儀被仰候
処御断ニ付而、被任御理
之上者、任先規長
字を入ニ出之候、恐々謹言

年号
六月日　上村信濃守
長勝判

井上源七郎殿
御宿所

一字之儀ハ成之
評所代々相承ル
長之字を以て候
別而被遂自為一候
右之儀ニて

年号
月日　名字当
長勝判

山本新兵衛殿へ参る

上中下右之通之下ヲ
諸事様ハ文言及事
何成紙ハ合文ヲ有様原
前後一枚成也ときとう
相中ハ一字書下ル給

長

天正八丁巳暦
二月三日　長勝判

山本新兵衛殿

勝

年号
月日　長勝判

山本某殿へ

就服部右衛門一家之儀
並給ニ雖科被ニ無之
所以家臣右京亮殿へ
同今度被召ニ長之字
進之ニ御信用有候ニ
可被継之

天正八年 上村信濃守
十二月廿二日 長□判

吉富右京亮殿
御中里

中島庫助

伊藤七郎
貞孝

中太京亮

綱ノ氏船大浦

高国

按ニ右段ニ組ニ記ニ小頭と折〳〵
中と云字上に書右下に右京亮
右頭に綱ノ氏船大浦右頭ニ
高国と如斯書下し先ハ氏船大浦
出て右京亮の右とや上條の
事と上包紙ニして上下と
折へし

賣券認様之事

賣渡田畑之事　山城国宇治郡
合拾反歩　柳沢村
右者我等頼代之所持遠者也
然ル依有要用限永代賣渡（代金何両）
申渡実正也右代金為後證
為其添證文渡進之候
上者於子孫ニ至迄違乱之儀無之候
也仍賣券状如件
年号月日
松崎郷九兵衛　光成判
中村新十郎殿

化書ハ也永々之云字なりけれは
売主證文ハ元返し之事也
一篇ふハ不て定地して其外之
文字ハ改有の下知を元法之

代官職補任状之事

城国郡筑郡右岡村代官職之事
右限三ケ年申合者也年貢
諸公事物并下裁密可有
執沙汰之若有不法之儀ハ
雖為年期内改補之旨
可改易者也仍補任之状
如件
年号月日　名字花　名字判
何某殿

大形代官也私より下知へハ
執沙汰と執沙汰しと書
證文とハ證文と書へし
被成ハ与とり書分一段
と下知之の差也

一 領中御給分山城國都筑郡
吉田村代官職之事
御年貢諸公事物等嚴密可
致沙汰若御蔵入沙汰ニ及
ふへし者雖為何時可被召放
其時不可及一言之子細
者也仍證文如件
年号月日　名字
　　　　　実名判
何誰殿

大形如此之筆勢を指本とす二ヶ年
或ハ五ヶ年抔と其時の申合に
依へし又年期を不申合も
ありし或ハ補任證文一ツ
申出て永く申立申合ゐるもあり
ありし先年の規式也

御字拝領御請文之事
御字拝領被成下 御内書頂戴仕
難有仕合仍為御礼御太刀一腰長光 黄金百両謹而
拾得致進上候此旨宜預御披露候恐惶謹言
十一月二日　村上兵庫頭
　　　　　　忠光判
中村弓水殿
人々御中

被成下　御内書謹而頂戴仕御家之面目至極
難有仕合奉存候付冥加仍例之進上仕候依御前
此席之義ニ付御取扱頼入候恐惶謹言

名字官
名実判

十月二日

何誰殿
御宿所

就御傘袋毛氈鞍覆被成御免之段被成下

御内書謹而頂戴忝以面目之至奉存候仍
為御礼御太刀一腰御馬一疋青銅万疋致進上之候
宜預御披露候恐惶謹言

十月九日

何誰殿
御宿所

今度御位御昇進之儀誠以目出度奉存候

仍御太刀一腰御馬一疋進之候、任佳例御祝儀計候

猶期後喜候、恐惶謹言

十一月五日

名字実

名乗判

何某殿 御宿所

代官家来林左時分

去夜中忍入其地門ヲ除、薫清ヲ致逃去候

以此段申上候、以御沙汰奉願上候

三月八日

貞時判

秋葉源四郎殿

就何村境目之論、従江一書中越候

承届候、来代官之者共、双方請文取揃

其海ハ支覚申候様候

三月十日　名字判

名字皮とのへ

右此一冊者雖為秘吏依御執心深
懇記進之平努〻不可有外見者也

寶暦十二壬午年
十月十日

水嶋卜也
之成

横山三郎右衛門
時連

早川茂右衛門
爲逢

原田傳内
元陳

村田小平太

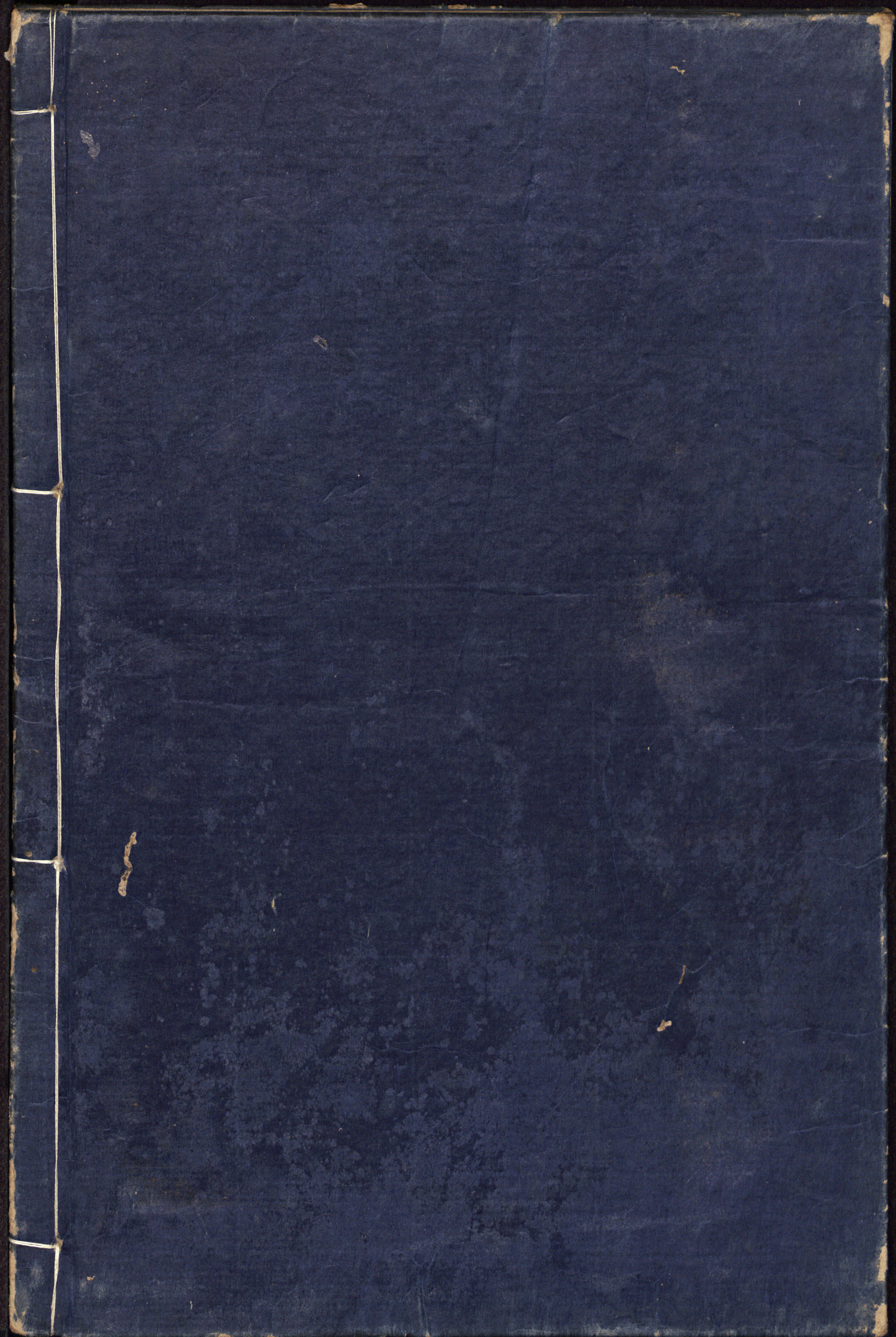


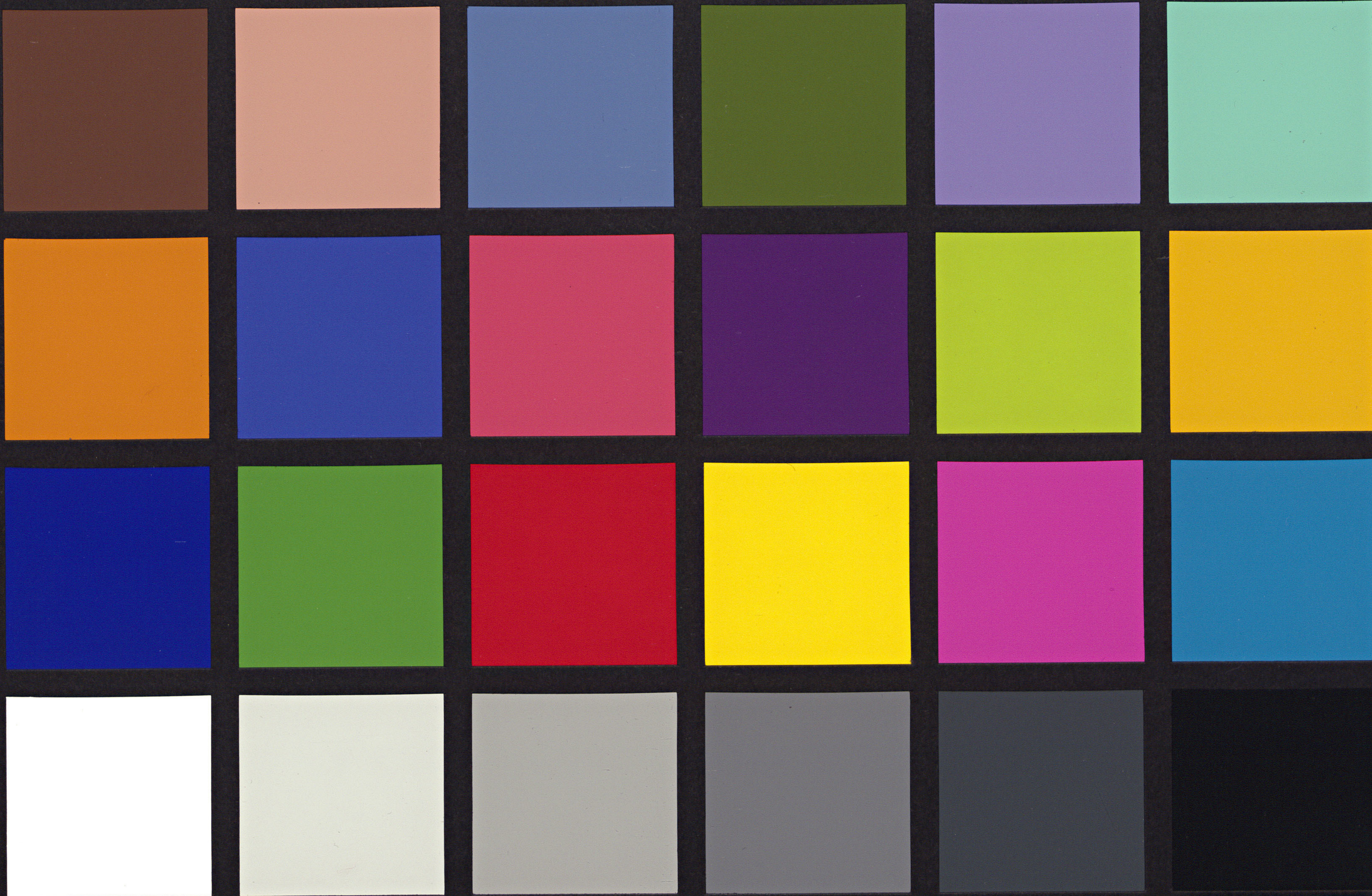
信岑



寶暦十二壬午年
十月十日

津村佐兵衛





H+K 2

GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart

15.01.2002